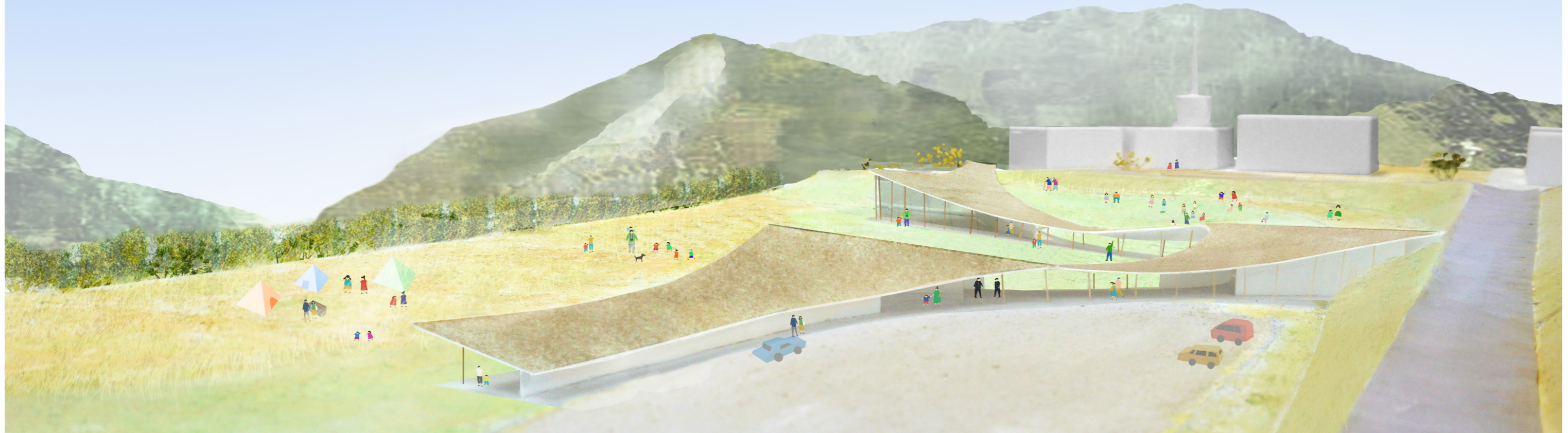


自然の営みとともに生きる震災ミュージアム

私たちは熊本地震震災ミュージアムの基本計画を尊重し、「自然の驚異を感じ、体験する」展示学習施設として熊本・阿蘇の雄大なランドスケープに呼応する、大地と空につながる震災ミュージアムを提案します。



設計にあたっての基本姿勢

ここにしかない場所をつくる

阿蘇山から熊本市へとつながる風景には、大地がこのようにできたということを直感的に感じ取る事の出来る雄大さがあります。ここにしかない特別な風景のある場所だからこそ、建築も風景と呼応し、ここでしか体験出来ない場所を生み出すべきだと考えました。

1. 山々、空、雨、大地、草花、風といった自然の風景が、いつもより強く心に残るものを感じられるような、大らかな建築をつくります。
2. 熊本地震の経験を受けて、私たちが後世に伝えていくべき記憶や経験、教訓とはなにかを、設計プロセスを通して真摯に学び、ともに考え、防災学、地球科学、哲学、民俗学をはじめとする幅広い視点で、自然の営みとともに生きる新しいミュージアムとして実現します。
3. 子どもから大人、高齢者、障がいのある方など、全ての人がその人らしい発見のできるミュージアムを目指します。全てを情報として提供するというよりは、体験する・感じる・考える、といった人間の本能的な学びを促すミュージアムを目指します。



大地の動きが感じられる阿蘇のランドスケープ

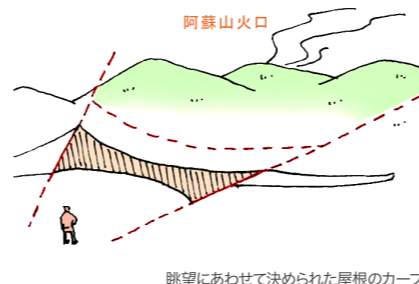
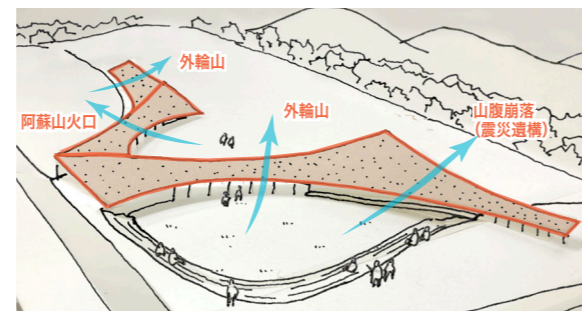


敷地をとりまく美しい外輪山と、震災遺構の見える風景

設計コンセプト

阿蘇の風景に呼応する屋根

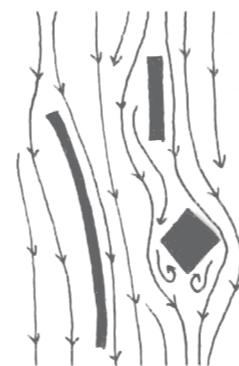
- ・敷地をとりまく雄大なランドスケープに呼応するために、流れるような平屋の屋根を、敷地を横切るようにかけます。
- ・周辺の山並みを想起させる、ゆるやかにカーブする屋根をかけることで、地面と水平につながる深い軒下や、空と山の風景を切り取る屋根の稜線が生まれます。
- ・屋根のほとんどは半屋外とし、風景を見ながら佇むことの出来る場となると同時に防災訓練や、修学旅行生の雨天時の集会所など様々な用途に使える場となります。
- ・震災遺構や阿蘇山火山口、外輪山などへの眺望を考慮して屋根のカーブや勾配を決定します。



眺望にあわせて決められた屋根のカーブ

場から場へと流れをつくる

- ・本プロジェクトでは、駐車場からミュージアム、震災遺構(地表地震断層・1号館)へとつながる回遊性が大切です。それぞれをバリアフリーでゆるやかにつなぐように展示空間を配置します。
- ・川の流れる中に一本の楔を打つと、そこから流れが2つに分かれたり、渦巻きが出来滞留する場が生まれたりするように、人や風の流れをやわらかく導き、場を生み出すように壁やボリュームを配置します。
- ・決められたルートのみをたどる展示ではなく、見学の規模や目的にあわせて複数のルートを選択出来る計画です。



壁によって人や風の流れをつくる

敷地を超えた大きな環境を取り込む

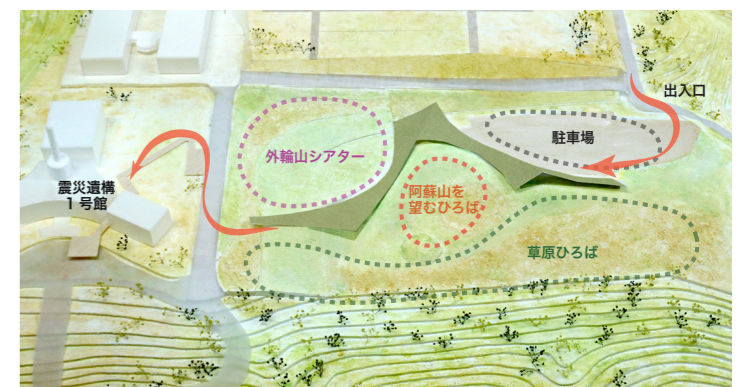
- ・計画が敷地の中だけで完結するのではなく、周囲の大きな環境をも取り込むように建物の配置や屋根の向きを決定します。
- それは、私たちが自然に取り巻かれていること、そして人間以外のものとの連関の中に生きていることを感じる場を目指すことにつながります。
- ・敷地外の遺構や風景への眺望に配慮した空間とすることで、訪れる人々に大地の営みや県内各地の震災遺構の存在を感じさせ、「熊本地震 記憶の回廊」構想と連携します。



配置計画

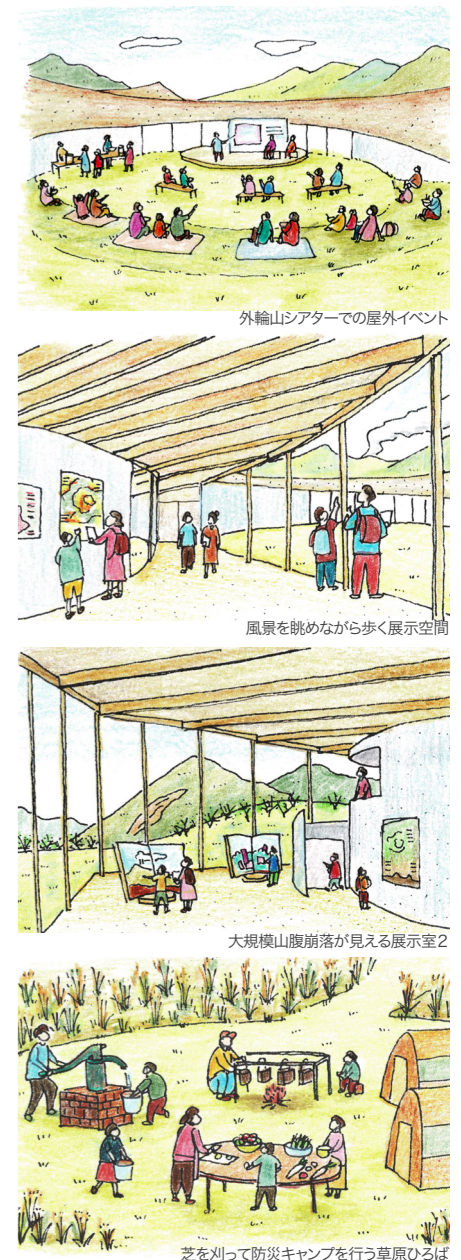
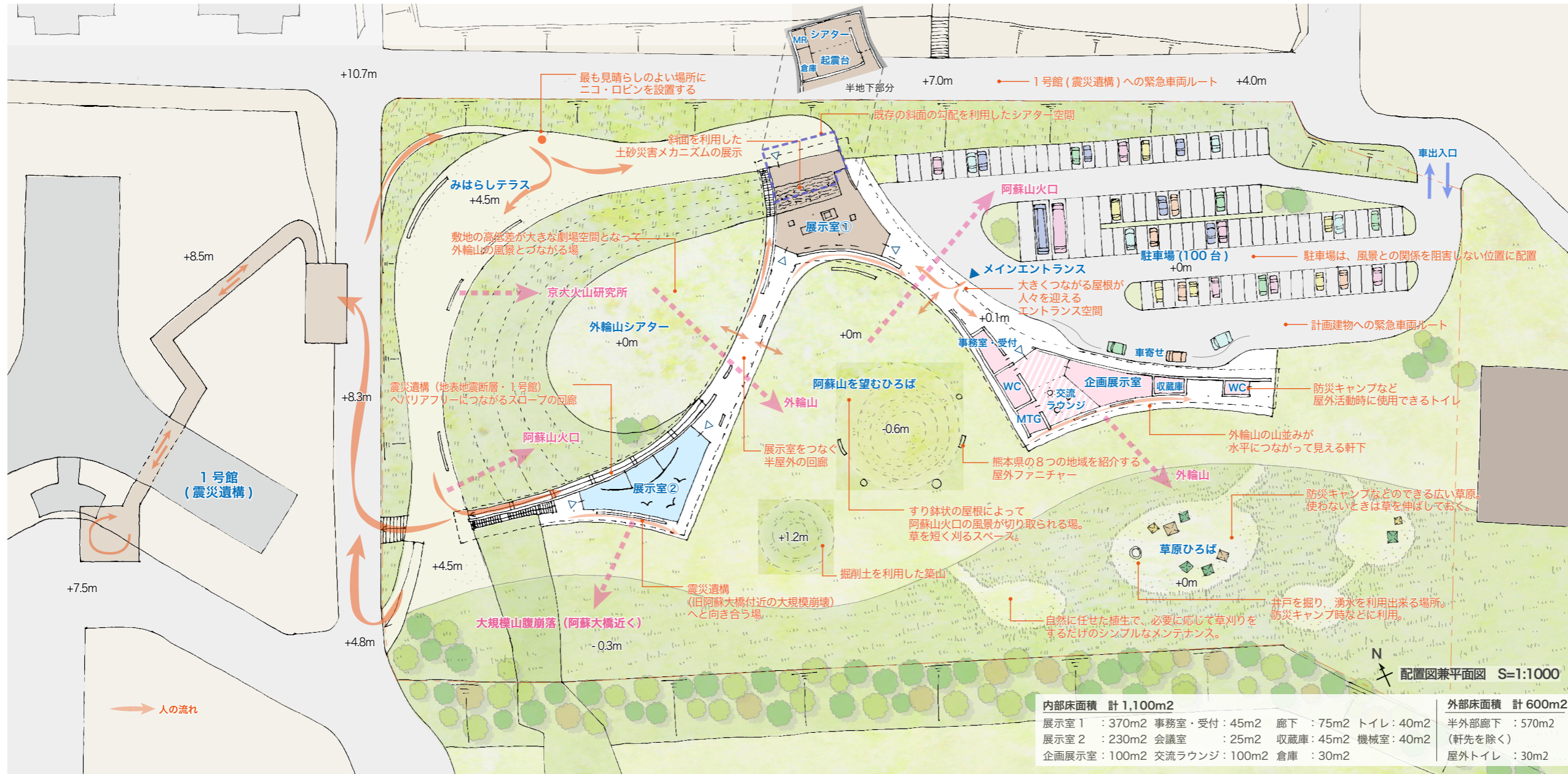
屋根によって生まれる明確な配置ゾーニング

- ・敷地を横断するようにかかる屋根によって、明確な配置ゾーニングとします。
- ・駐車場は敷地入口付近に設け、眺望を阻害しない位置とします。
- ・敷地の中央には阿蘇山火山口をのぞむ広場が生まれます。
- ・敷地高低差があることを積極的に利用し、大きな屋外シアター空間をつくります。
- ・南西側に下る斜面に向かって低く広い草原の広場をつくり、水平に連なる外輪山の風景への連続性を大切にします。



阿蘇の草原のような、回遊出来るおおらかなランドスケープ

広い敷地を回遊しながら、遠い山や空の風景、近い地面や植物の風景の双方を感じ取ることの出来る配置計画です。屋根のかかったスロープで震災遺構（地表地震断層・1号館建物）までバリアフリーで自然にアクセス出来ます。



ランドスケープ計画

シンプルなメンテナンスで多様な表情が生まれる植栽計画

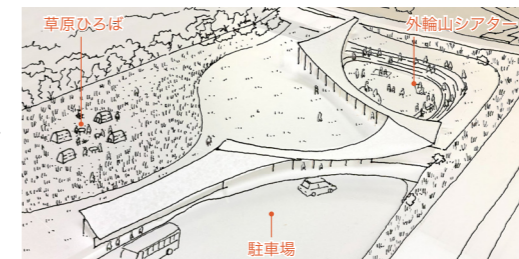
- 敷地全体に芝の種をまき、その後は自然の植生に任せることで、阿蘇の草原と連続するおおらかなランドスケープが生まれます。広場として利用する場所は草を刈り、使わないところは長いまま残しておくというシンプルなメンテナンスのみで、多様な居場所を生み出します。
- 建設の際に発生する土を敷地内に盛ることで、子どもたちが遊べる小さな丘やくぼみをつくります。



屋外空間について

防災・レクリエーション等に使える屋外空間

- 湾曲する屋根と、既存の地形の関係によって多様な屋外空間が生まれます。地形段差を利用した外輪山シアターは防災フェスティバルの会場に、山々に向かって開けた草原ひろばは防災キャンプの訓練場所として、今後の大規模自然災害に備える場所となります。また、日常的に修学旅行生がお弁当を食べたり、ゆったりと散策したりできる場所にもなります。

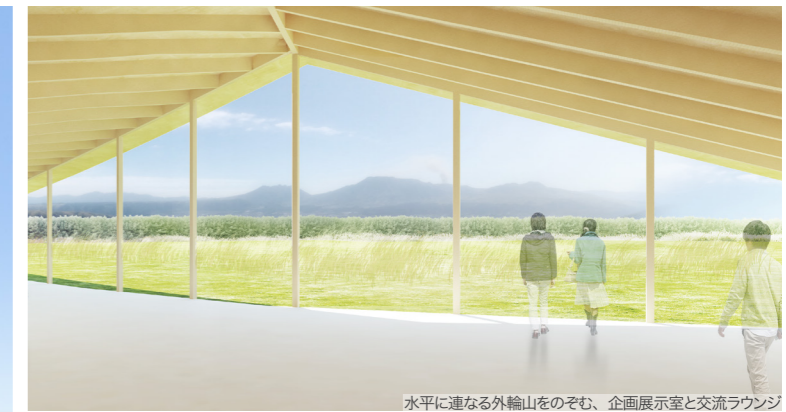


ランドスケープと屋根

人間が自然の中で生きていることを感じる場をつくる



立面図：山々の風景と対応する行まいをつくる、大きな屋根



水平に連なる外輪山をのぞむ、企画展示室と交流ラウンジ

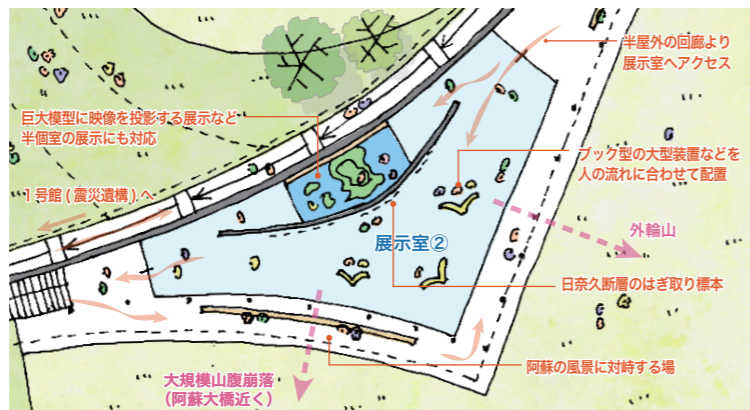


震災遺構へつながるスロープと外輪山シアター

施設の維持・継続性を考慮した体験展示施設の平面計画

風景に応答する屋根や壁によってつくられた、ワンルームでフレキシブルな空間

- ・風景に응答する屋根や壁によって、3つの屋内展示空間が生まれます。展示ごとに小さな個室に分けるのではなく、大きなワンルームの中に、人の流れにあわせた展示物が点在するフレキシビリティの高い計画です。
- ・大屋根や長い壁は、長いタイムスパンで存在する風景との応答で位置や形を決める一方で、小さな展示壁は、将来的に変化する展示内容にフレキシブルに対応出来るようにつくります。一つの建物の中に、変わるもの、変わらないものがある建築です。

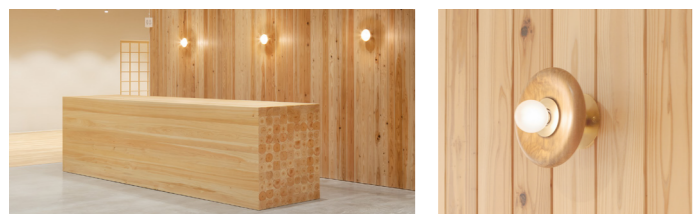


県産木材の活用および構造安全性の確保

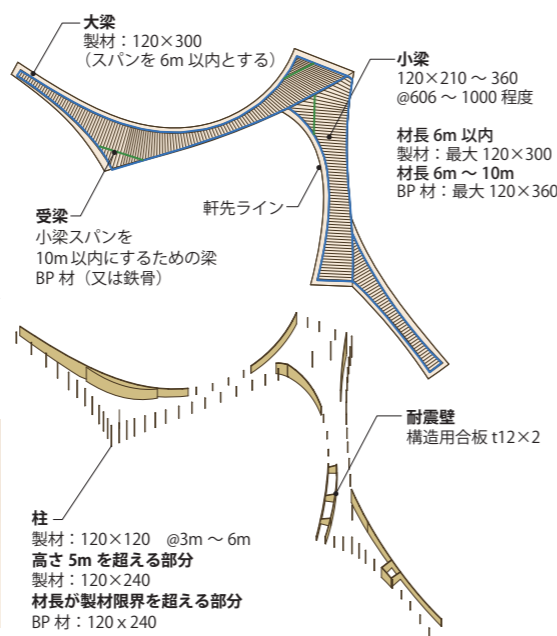
経済性に配慮し、軽やかで大きな屋根をつくる

- ・大きな屋根を製材で経済的につくる、合理的な架構とします。
- ・曲率が緩やかな曲面屋根を直線材・平面材でつくります。
- ・大部分の部材長を6m以内とし、地元製材が使いやすい計画とします。
- ・一部柱、梁長さが6mを超える部分は※BP材とし、製材利用と連携した計画とします。(※BP材：120x120の製材をエポキシ樹脂で圧着し積み重ねた材)
- ・曲面壁を耐力壁として利用し、意匠・展示計画と構造計画が一体となった計画とします。

地域産木材を内装や家具に積極的に利用



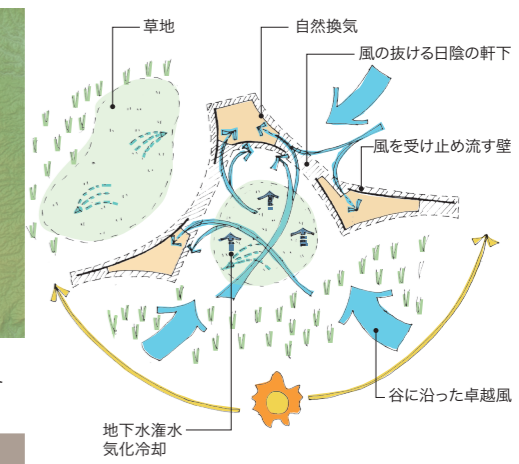
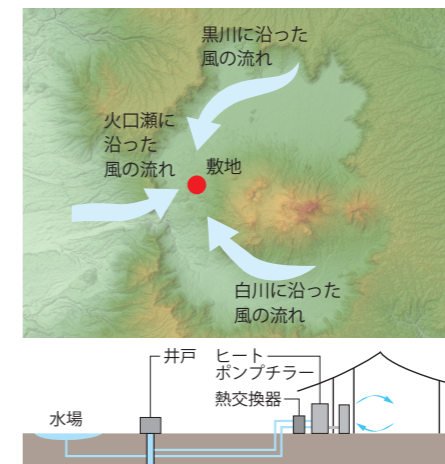
地域産材を利用してつくられた家具や照明 (応募者による事例)



環境・省エネルギー性に関して

阿蘇の自然が促す、風、光、水の交わる環境デザイン

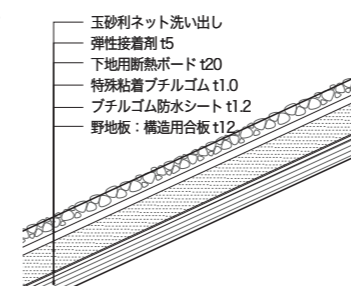
- ・阿蘇の豊かな自然が日常に微気候を生み出し、風・光・水の交わる阿蘇の麓ならではの環境デザインです。
- ・谷筋に添い三方から流れる卓越風を、建物自身がウインドキャッチャーとなり導くことで、屋内や軒下へのクロスベンチレーションを生み出します。開口部は降灰時には自動で開閉制御します。
- ・伸びやかな屋根が自然光を巧みに操り、直射を遮るとともに時間や季節の移ろいを映します。
- ・豊富な地下水は、冷暖房から雑用水、灌水、防災キャンプとカスケード(多段階)に利用され再び地球へと循環します。
- ・建物の中に居ながらも自然の力を感じられる環境デザインになります。



意匠性・安全性・メンテナンス性に配慮した素材

地面と連続性のある屋根素材

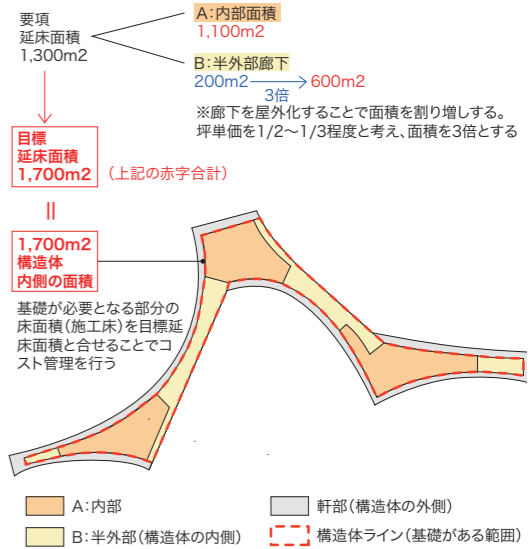
- ・屋根の素材は、地面と連続性のある玉砂利洗い出し仕上げとします。火山灰が降っても、屋根面が汚れたように感じられない素材とします。
- ・木造屋根に施工可能な湿式仕上用断熱ボードを下地とし、タイルと同じ要領で施工できる玉砂利ネット洗い出し仕上げを採用します。
- ・防水はプチルゴム系接着工法とし、断熱ボードの下に防水層を形成します。玉砂利仕上げは防水層に対する保護層として機能します。
- ・木造屋根に対する同工法(タイル仕上)の施工実績は、応募者設計の公共建築で採用の実績があります。(某市町役場：延床 300m²)



バリアフリー・ユニバーサルデザインおよびコストについて

誰にとっても居場所がある、長く使いやすい建築を目指して

- ・敷地の高低差をスロープでつなぎ、バリアフリーに配慮するとともに長い廊下空間を魅力的な展示空間とし、誰もが通ってみたいくなる場所とします。各廊下幅は十分に確保します。
- ・適切な数の多目的トイレを屋内外に設けます。
- ・共用部の廊下を軒下の半屋外空間とすることで、空調エリアを絞りインシャルコストおよびランニングコストを抑えます。
- ・建設時に発生する土を敷地内に盛土し、排土のない計画とします。
- ・坪単価別にエリアを分け、各エリアの面積を調整することで、設計の初期段階から全体の予算管理を行います。



熊本全域に広がる自然と応答し、震源域の地ならではの体験を通して一人ひとりの物語をつむぐ

大分ー熊本構造線の中心に位置する本計画地は地形的・地質的に特徴があり、震災における大地の動きを目のあたりにできる特別な場所となります。そのような場所につくられる“自然の営みとともに生きる建築”だからこそ、展示においても日々変化する自然と応答し、この場所にしかない体験を随所に取り込むことによって、地震の記憶を呼び覚まし、教訓を継承し、さらには熊本県内全体に広がる「記憶の回廊」へとつながっていく展示を目指します。

訪れる人がそれぞれの方法で自然の力を感じとることで、地球は生きているということ、その長く大きな営みの中に私たちの暮らしや文化があることを学び、未来へと繋げていく展示を提案します。

物語をつむぐ“展示構成”のポイント

1. “事実や原理を知る” & “自然に触れ自ら考える” 往還型の展示構成

熊本地震の記憶・教訓の継承には、地震の多様な情報を「知る」ことと、知りえた知見をもとに自分自身で「考える」両面が重要と捉えます。事実や原理を「知る」3つの展示ゾーンと、各ゾーンをつないで地震等の災害の正体＝自然を感じながら「考える」展示を組み合わせ、自由に行き来できる展示構成で一人ひとりの「物語」をつむぐ場とします。

2. 本計画地を巡る体験が、県内各地の「熊本地震 記憶の回廊」につながる展示構成

中核拠点の重要な役割である県内各地への誘導策として、熊本県内巡りに見立てた展示ファニチャーを各所に設けるとともに、ここで気づいた学びや各地への興味をスマホ等のツールで持ち帰られるシステムを構築。本計画地での回遊体験を契機に、「熊本地震 記憶の回廊」をはじめとした熊本県内各地への観光回遊につなげていく展示構成です。

物語をつむぐ“演出”のポイント

3. 記憶の継承効果を高める「ストーリー」「体験」「協働」を組み合わせた展示演出とデジタルデバイス

熊本地震の記憶を広く継承していく効果的な工夫を重視。事象の前後関係や因果関係を伝えることによって理解を深める効果の高い“ストーリー性”、地震の原理や大地の構造といった一般にはわかりにくい情報をわかりやすくする“体験性”、ともにすることによってこの場所での経験を定着させる“協働性”という3つの特色を、各展示開発の考え方として重視します。

また、学習や観光地巡りには欠かせない情報サービスにも配慮し、個人個人のスマホ等のデジタルデバイス利用を前提にした学習・体験支援&観光案内等のサービス・システムを視野にいたした計画。ニコ・ロビン等のキャラクターが県内各地を案内・誘導するサービスやAR アプリ等との連動も想定します。

各展示企画

① 記憶の始まりカウンター

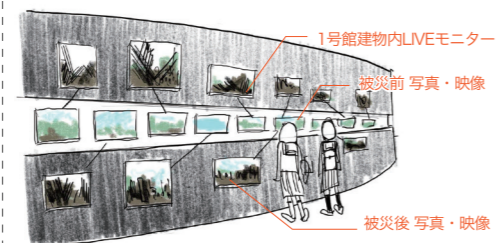
中核施設の楽しみ方&スマホ向けガイドアプリをやさしく入手



※端末貸出も行う

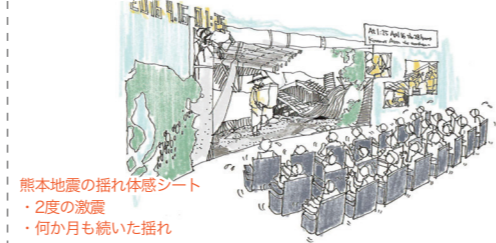
② 阿蘇のすがた

地形を一変させた地震の巨大なエネルギーを体験！
被災のbefore/afterを一目で伝えるプロローグビジュアル



③ 熊本地震その時シアター

その時なにか起きたのか？をすべての人が実感
震度7が2回襲った28時間ドキュメント・シアター



④ 地震を体感する

「なにもできない！」ことを学ぶ、縦揺れ・横揺れ体験
過去の世界の巨大地震を疑似体験する演出型機新装置



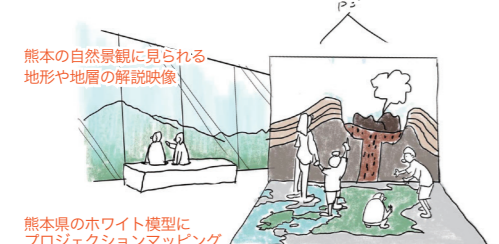
⑤ 地震の仕組みを知る

現場で役立つ景観の読み解き方を知る。
見えない原理を見やすく読み解ける体験型立体ビジュアル装置群



⑥ 熊本の大地は生きている

「わわわ！この真下に大分-熊本構造線?!」を実感する、来館者が今建つ場所から地球内部を行き来するスケールup&downシアター



⑦ 自然の驚異と恵み

県内各地に受け継がれる先人の知恵を知る
「やま」「うみ」「まち」の人々の営みと知恵をたどるブックビジョン



⑧ これからに備える

防災・減災を楽しみながら身につける
敷地をフル活用した防災プログラムフィールド



⑨ あなたへの問い

空や風や草原からの問いかけに答えよう！
自然と人の関わり方を自分自身で考える
投票参加型展示



⑩ 語り継ぐ

震災の実態をオーラルヒストリーで伝承する
語り部&コミュニケーションサロン



⑪ 記憶の回廊ファニチャー

各地の被災の特色と来訪時の見所がわかる
県内8ヶ所の震災ミュージアムを凝縮したファニチャー



流れに沿って展開する展示計画

